琉球大学学術リポジトリ

『執心鐘入』と『ハムレット』：宿の女とオフィーリア

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-12-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002002299

Ryudai Review of Euro-American Studies No. 43,1998

『執心鐘入』と『ハムレット』：宿の女とオフィーリア

吉村　清

悪縁の結で	ああ、気高いご気性が壊れてしまった！
はなちはなされめ	……
ふり捨てていかは	そして私は、世にも惨めな捨てられた女
一道だいもの	誓いの調べという甘い密を味わったのに、
	…… ああ、悲しい
The fatal love now that fastened	O, what a noble mind is here o'erthrown!
Never will I give way,	……
If you abandon and make off,	And I, of ladies most deject and wretched,
You choose the path to death.	That suck'd the honey of his [music] vows,
(屋宜盛峰教授訳)	……O, woe is me (3.1.150-60)

組踊は、首里王府の命を受けて踊奉行の玉城朝薫が、翌年の尚敬王冊封式典に向けて、1718年に創作した沖縄方言による韻文の戯曲である。冊封式典後の余興芸能として、『執心鐘入』は『二童敵討』とともに首里城正殿横の特設会場で上演されている。この時の中国からの副使徐葆光の著作『中山伝信録』にある重陽の宴のプログラムには第3番目として組まれており、タイトルは『鐘魔事』とある。朝薫の組踊に低通する思想は、儒教道徳で最高の美徳とされていた忠孝・節義であり、当時の首里王府とそれを支える士族階級の思想そのものであった。一方、シェイクスピアの『ハムレット』（1602年頃初演）は、上はエリザベス女王から下は庶民までを視野に入れてグローブ座で公演されたもので、息子による父の仇討ちという点で内容的には『二童敵討』に似ており、いわゆる王子ハムレットが、紆余曲折の末、自らの命を犠牲にして殺された父の仇を討ち、その結果デンマークの病んだ政情が回復されるという作品である。

『執心鐘入』は別名中城若松とも呼ばれているが、この作品の中心はなんと

いっても宿の女であろう。この劇の構造を前半は女と若松の対決、後半は女と座主との葛藤と捉え、女を劇の中心に置いて構わないと考える。特にこの劇の後半を考えるとそう思える。後半では若松は女の執念に圧倒され、恐怖に駆られ必死の思いで寺に逃げ込み、座主に助けをもとめるだけの美少年でその存在感は希薄である。対照的に、『ハムレット』に登場するオフィーリアは、宿の女ほどに中心的な役割を担っているわけではない。オフィーリアは純情可憐な乙女で、王子ハムレットの美しい恋人という設定になっているが、国王クローディアスと彼を父の仇とするハムレットの対立の主軸のそばの地味で目立たないマイナーな人物でしかない。本稿では、両ヒロインを境遇、容姿、性格、恋愛への姿勢、強い精神的打撃への反応の面から対比していきたい。

宿の女もオフィーリアも境遇的には男親との生活をおくるといういわば箱入り娘的なイメージをもっているが、二人の容姿は前者が妖艶で後者が可憐と対照的である。前述した徐葆光の『中山伝信録』の梗概によれば、宿の女は名は不明だが、浦添山中の一軒家に住む16歳になる猟師の娘で、頗る妖麗とある。後半で若松を救うべく女と対決する座主は彼女を「花ざかり女」と形容する。座主の命で鐘の警備に当たる小僧のうち小僧（一）は、女が現われると、厳しい態度をみせるのは最初のうちだけで、彼女の色香と切々と訴える恋情に簡単にほだされて彼女を女人禁制の境内にいれてしまう。小僧（一）の次の台詞は、彼が「御縁てす知らぬ／恋の道知らぬ」と言い切って女を拒絶した若松とは対照的に彼女の魅力を如実に示している。

春の花桜	Cherry blossoms that bloom in spring
色美らさあすが	To the eye they're past beautiful.
またも匂まさる	Yet sweet smell added to fair o'form
梅どやゆる。	True worth, the *ume* blooms!

一方、オフィーリアはデンマーク王国の宰相ポローニアスの娘であり、恋人ハムレットには「美しいオフィーリア、森の妖精」（3．1．87−88）と称えられ、兄レアティーズには「五月の薔薇！／いとしい乙女、優しい妹、可愛いオ

フィーリア」（4．5．158-59）と呼ばれ、また、発狂し宮廷で歌う彼女はレアテーズに「悲しみも悩みも苦しみも、地獄そのものも／こうして愛らしく美しいものに変えてしまう」（4．5．188-89）と評価される。狂死した後の葬儀の場では、再びレアティーズに「美しく汚れのない妹の体からは／スミレの花が咲き出すだろう」（5．1．239-40）と弔辞を述べられる。彼女は、あやしいまでにセクシーで美しい宿の女とは対照的な、裁縫、草花、それにバラッドを歌うことが好きな純情可憐な乙女なのだ。

宿の女とオフィーリアでは、恋愛にたいする姿勢も異なり、前者は破壊的なまでに攻撃的で積極的であり、後者はあくまで自己破滅的なまでに受動的である。宿の女には恋人はいないが、かねてより美男の誉高い若松に恋慕していたようだ。若松は首里奉公へ向かう途中、日が暮れて山中の彼女の家に一夜の宿を乞う。最初、彼女は親の留守中に見知らぬ人を泊めるわけにはいかないと若松を断わる。ここまでは親のいいつけに従順で世間体を意識する普通の娘で、オフィーリアと軌を一にする。しかし、若松が名乗り再度宿泊を希望すると、彼女の態度は一変し、胸ときめかして歓迎する。その後、彼女は、親の留守をいいことに、家の灯りを吹き消し、寝入っている若松を起こし、燃える思いを吐露し、言葉巧みに彼を誘惑する。

約束の御行合や	An arranged meeting with one another,
だにすまたしちやれ、	Just an ordinary matter.
袖のふやはせど	A chance brushing of sleeves rather
御縁さらめ。	Doth oft create true ties.

彼女の誘いになかなか乗らない若松に対して、女は若松の男としてのプライドを刺激する作戦にでる。

をとこ生まれても	Granted that you are born a man,
恋しらぬものや、	If devoid of tender passion,
玉のさかづきの	A chrystal grail should you be deemed
底も見らぬ。	With its bottom shattered.

義理を楯に彼女を拒む若松に、彼女は激しい一方通行の恋情をぶつけていく。彼女は一夜の殺奈的愛に賭けたいという自分の気持ちを即行動に移すタイプであり、その恋を成就し満たされたいと願い、うぶな若松を襲う自己裸出型の若い女性である。若松に拒否されると、その恋慕は激しい怒りと憎悪に変貌し、若松との無理心中を遂げようとする。

歌　千瀬に居るとりぶし

悪縁の結で	The fatal love now that fastened
はなちはなされめ	Never will I let it give way,
ふり捨てていかは	If you abandon and make off,
一道だいもの。	You choose the path to death.

漆黒の冬の夜中、女は逃げる若松を末吉宮まで追っていく。若松は寺の座主に「慈悲よわが命／救てたばうれ」と懇願し、座主は若松を開静鐘の中に隠し３名の小僧たちにその警備に当たらせる。やがて女が現われる。

女道行歌：<七尺ぶし>

露の身はやとて	Man's life here is brief as the dew.
自由ならぬよりは	I wish to live it full and free.
里とまいて互に	Or else, I'd rather seek out my love
一道ならに	And with him I'd choose to die.

恋の道が自由にならないのなら、若松を探して無理心中しようとの決意が歌いだされている。座主の命で警戒に当たる小僧のうち小僧（一）と小僧（二）はいいかげんで、女が現われると、厳しい態度をみせるのは最初のうちだけで、彼女の美貌と切々と訴える恋情に簡単にほだされて彼女を女人禁制の境内にいれてしまう。女は必死になって若松を捜すが、若松はどうしても見つからない。激しい恋情を満たすことができずに、彼女は深い失意に耐え切れず、やがて狂乱状態に陥る。そんな彼女の心情を地方が「さん山ぶし」の曲に乗せて歌う。

歌：<さん山ぶし>

此世をて里や	Never in this life could I hope
御縁ないぬさらめ	Conjugal relations with my love.
一人こがれとて	I alone do burn with desire,
死ぬが心気	Burn to death I incline!

彼女は境内の鐘を不審に思い、そのなかに入り、やがてその執念は彼女を鬼女にする。彼女はそのことを後悔もせず、ひたすらに自分と若松の間の障害となっている座主と小僧たちを無言のうちに激しく攻撃する。彼女は自己破滅を厭わない暴走型の女であり、彼女の発揮する迫力ある情念のパワーは人力を遙かに超越し、座主たちはひたすらに法力による呪伏をめざす。最後には彼女は呪伏され、いずこへともなく走り去る。彼女は前半で若松に拒絶され、後半では座主の計らいで若松に逃げられ、強烈な精神的打撃を受け、狂乱状態に陥るのだが、鬼女と化してなお自分の執念に忠実で妥協を知らず、ましてやオフィーリアのように状況に翻弄されて発狂もしないし、自殺もしない。

オフィーリアの場合は、最初はハムレットとの清らかな愛に幸福を感じるという恵まれた状況にある。王子に優しくされているが、愛そのものにたいしてまだ経験不足で、受動的である。若松に強引に一夜の恋を迫る直情型の宿の女とは対照的である。しかし、兄レアティーズは王子の妹への愛は一過性のもので、彼女を単なる玩弄の対象としていると考え、王子との交際は十分に用心しろと忠告する。「だから気をつけろ。用心こそが最良の安全策。／若い血はほうっておいても勝手に騒ぎ出すからな」（1．3．43-44)。その直後、ポローニアスはオフィーリアに王子との仲を問いただす。

ポローニアス

……

お前はわしの娘であり、嫁入り前の大事な身だぞ。

二人の仲はどうなっているんだ？　本当のことを言いなさい。

オフィーリア：近頃は、優しい言葉でくりかえし愛を

打ち明けてくださいます。

ポローニアス：愛だと？　下らん、まるでうぶな娘だ。

あぶない目に合いそうなのが分からんのか。

で、その愛のお言葉とやらを真に受けるのか？

オフィーリア：どう考えていいか分からなくて。(1．3．97-104)

ポローニアスは娘を一時のたわむれで傷ものにされたくない一心で二人の交際禁止の命令するが、父親依存型のオフィーリアはそれに素直に従う。「お言いつけに従います。お父さま」(1．3．136)。オフィーリアは、父の留守を好機と捉え、若松を強引に誘惑する宿の女とは極めて対照的で、王子との愛に受動的で、父に従順で反逆することを知らない娘である。

宿の女は本音を表出し、自分の妖艶さを武器に、一夜の恋情を満たすために若松を誘惑し利用しようとするが、オフィーリアはその純粋無垢ゆえに見近な人々に利用される。『ハムレット』では、父の亡霊に復讐を命じられたハムレットは自己防衛と国王をスパイするために狂気を装い、うぶなオフィーリアの前でその演技力を発揮する。彼女は王子の真意を見抜けずに、佯狂の策にまんまとはまり、自分が一方的に絶交宣言をした結果、ハムレットは気が触れたと思い込む。彼女が突然の王子の変貌に動転し、そのことを血相を変えて父に報告すると、ポローニアスも失恋ゆえの発狂と考える。「まさしくこれは恋ゆえの狂気。／その激しさは身を破滅させ／血迷ってなにをしでかすか分からない」(2．1．99-101)。この父娘は単純にも王子の仕掛けた罠にはまってしまう。父親はさらに娘に問う。

ポローニアス

…

おい、近ごろつれないことでも申し上げたのか？

オフィーリア：いいえ、お父さま、でもお言いつけどおり

お手紙はお返しし、もうお越しにならないよう申し上げました。

ポローニアス：それで気が狂われたのだ。　　(2．1．104-07)

父親に盲従するあまり、一方的かつ突然に王子に対して絶交宣言をした彼女は、ハムレットにとってつれなくも冷たい娘に写ったことだろうが、そのようなハムレットへの優しい配慮を示す余裕は彼女にはない。王子の恋心に鈍感なこの娘は恋に淡泊な若松とどこか重なる。また、ポローニアスがハムレットにたいして抱く「恋狂いした王子」のイメージはそのまま座主が若松に語る宿の女のイメージに当てはまるといえよう。

座主：（唱え）

女恋ごころ　　Woman's awakening of love

麁相にども思うな。　　Take heed not to slight nor contemn.

思積てからや　　Mark ye that a woman obsessed

命も取ゆん。　　Oft proves a deathly source.

宿の女は演技しない、自分の感情を裸出し、即行動に移す。一方、国王と父の意向で、オフィーリアはハムレットの狂気の真偽を確かめるために囮役を押しつけられるが、小心でナイーブな彼女の稚拙な演技はすぐ王子にばれてしまう。盗み聞きしている父や国王のいいなりになって利用されるだけのそんな彼女に未熟さと脆弱さを見い出し、王子は彼女を罵倒する。彼は彼女の貞操と美貌を揶揄し、女性全般を罵り、結婚を呪い、災いの元となる結婚を避けて生涯独身を通すために尼寺へ行けと激しい口調で言う。王子の佯狂の迫真の演技を真に受け、王子の狂気を疑いのないものとして信じ、オフィーリアは孤立し、失恋の痛手に苦悩する。

ああ、気高いご気性が壊れてしまった！

…

そして私は、世にも惨めな見捨てられた女

誓いの調べという甘い蜜を味わったのに、

いま目の前で、涼やかな鐘のようだった

気高く尊い理性が、ひび割れた調子はずれな音を出している。（3．1．150-58）

彼女と王子のやりとりを観察していた国王はすぐに王子の乱心が恋ゆえではないと見抜く。しかしポローニアスには国王の洞察が理解できない。彼は王子の乱心の要因が「叶わぬ恋」だと繰り返す。この言葉はハムレットの狂乱と罵倒にひどいショックを受け、呆然自失しているオフィーリアの心に深く根付いたことであろう。宿の女とは異なり、彼女はかつてはハムレットの優しい愛の誓いに甘い蜜のような幸福感を満喫したのであったが、今では王子の狂気に圧倒され、失恋の深い悲しみに身を委ねることしかできない。宿の女のように激情に駆られ、ハムレットにたいして激怒したり、憎悪したり、殺意を抱いたり、執念深く追い回したりすることはない。父に依存しながら、父を相談相手にすることも叶わないうえ、恋愛経験も乏しい彼女にとって、言動や行動の変化の激しいハムレットをどう理解すればよいのかわからない。二人が劇中で初めて顔を合わせ、その仲がひび割れる尼寺のシーンでは、王子は「お前を愛したことなどない」、「尼寺へ行け」と冷たい言葉を激しく浴びせながら、後続の劇中劇の場面では何食わぬ顔で、彼女の膝を枕にして、卑猥なジョークを飛ばす。これを彼女はどう結びつけて考えたらいいのか分からない。彼の極端な挙動にふりまわされても、彼女はその苦痛にじっと耐えるタイプなのである。彼女は自分を利用する王子を責めずに、自分の惨めさを嘆く。

宿の女は激情を彼女自身もしくは古典の曲に託して表出するが、オフィーリアは自分の感情を抑制するタイプで、発狂して初めて本音を吐露する。突然の失恋、乱心の王子のイギリス追放、謎に包まれた父の急死といった度重なる精神的打撃にオフィーリアは孤立を深め耐え切れず発狂するが、発狂して初めて自分のうちに秘めていた感情や思いを支離滅烈な言葉やバラッドに仮託する。そのような行動を性的欲望を抑制してきた彼女の潜在意識の表出とみることも可能であろう。あるいは狂気を通して初めて自立を確保する哀れなヒロインと位置ずけることもできよう。観客が目撃するのは、オフィーリアの狂気に至る過程ではなく、既に狂気に支配されている彼女である。彼女は王妃への面会を理由に宮廷に登場する。彼女は周囲の者には不可解なバラッドや流行歌の断片を歌う。

あの人はもういない
あの人はもういない
頭を覆う青い草
足もとに立つ墓の石
.....
恋の涙に泣きぬれて　　(4.5. 29-40)

この歌は挽歌とも失恋歌ともとれるが、恐らく急死した父と、狂気を装った果てに、国王に危険人物とみなされイギリスへ送られたハムレットを重ねているのであろう。オフィーリアは次の歌を歌う。

明日はヴァレンタインの日
朝早くから窓辺に立って
一目会えたら願いがかなう
恋しい人は起きてきて
扉を開けてくれました
入るときには生娘でも
出てくるときはそうじゃない。

聖人さまの名にかけて
ほんとにひどい恥知らず
若い男がその気になれば
やることなすことみな同じ
あなたがわたしを抱く前に
夫婦の約束したくせに
男の返事はね
お前のほうから抱かれにこなきゃ
きっとそうしていたものを
王：いつからこんなふうなんだ？

オフィーリア：きっと何もかもうまくいくわ。辛抱しなくてはね。でもね、冷たい土の中で眠っている人のことを思うと、どうしても泣けてしまう。兄にも知らせます。

（4．5．48-71）

彼女の歌う歌は、乙女との性の快楽の後彼女を捨てる若い男性に対する不信の歌であり、この歌に現われている男性観は、ポローニアスがハムレットとの交際を禁じるときのハムレット観と同様である。ポローニアスは死してなお娘をマインドコントロールしているのである。「兄にも知らせます」の一言は、全面的に依存してきた父を失った今、依存の対象を兄に変えた、自立できない娘の言葉と解される。卑猥な歌は狂う前のオフィーリアには考えられず、狂って初めて、自分の無意識に閉じ込めておいた性的欲望が表出する。レアティーズには王子との交際は慎重にと忠告され、直後に父からは絶交を命令され、狂気を装う恋人には尼寺へ行けと罵倒され、彼女の一人の娘としての性的な側面は周囲の男たちによってがんじがらめにされてきた。狂気の世界に足を踏み入れて初めて、彼女は卑猥なバラッドを通して自分の女性性を主張している。歌のなかで、乙女を抱いた後極端に冷たくなる男は、狂気を装い、愛に冷笑的な態度をとったハムレットへの恨みの反映だろうか。そんな彼女を国王は一面的にしか理解しようとしない。

王：ああ、深い悲しみは猛毒だ。その源はすべて父親の死にある。

（4．5．75-76）

『中山伝信録』によれば、若松に断固として拒絶された宿の女は「猟具を持して松寿を殺さんと欲す」、また鐘に入った後、彼女は「鐘より倒まに首を垂れ、鬼面を出し見はし、一叉を手にして諸僧を下し撃つ」とあり、攻撃的で暴力的な激情の女にふさわしい武器を手にする。対照的に、純情可憐な娘にふさわしくオフィーリアは草花をもって再び宮廷に登場する。その草花に花言葉を添えて国王たちに配るのだが、花言葉に詳しい知識は慎み深い乙女の生活の反映といえるだろう。彼女は国王たちに花をあげるが、花言葉が彼等の性格と欠

点を適切に物語る。正気のときには、他人や現実と対立することを回避してきた退嬰的な少女だったが、狂気という突出した形で初めて自己主張し批判的な本音を言う。

> オフィーリア：はい、マンネンローよ、思い出のしるし―ねえ、
> お願い。忘れないで。それからこれは三色スミレ、ものを思うしるし。
> レアティーズ：狂気の中にも教えがある。ものを思って忘れるなということか。
> オフィーリア：「クローディアスへ」あなたにはおべっかのウイキョウと不倫のオダマキ。「ガートルードへ」あなたには悔いと悔やみのヘンルーダ。私の分も少しね。これは安息日の恵み草とも言うのよ。それぞれ違った意味を込めてつけましょう。これは悲しみのヒナギク。忠実なスミレもあげたいんだけど、お父さまが亡くなったとき、みんな萎れてしまったの。幸せなご臨終だったんですって。　　（4．5．165-86）

オフィーリアの突然の死は王妃によって事故死であると報告されるが、実際は川に身を投げ自殺するのである。強い精神的打撃を被り、それに耐え切れず発狂した彼女は自らの命を絶つ。若松に拒絶されると、怒りと憎悪のかたまりとなって、彼の命を狙う執念の女と化す宿の女と違い、オフィーリアは清純さと脆さを併せもった少女なのである。

結びとして、宿の女は通常は親の期待に答え従順な娘を演じているが、親の留守中に憧れの若松が来ると、自分の妖艶さを武器に大胆に彼を誘惑する。若松の拒否にあうと恋慕の情が激怒へと変貌し、殺意を抱いて執拗に若松を追い回すが、彼を見い出せず鐘に入り鬼女と化し、最後には座主の呪伏によって追放される。一方、オフィーリアは父のいいなりになる娘で、そのために失恋の憂き目を味わい、生きる上で支えとなっていた父を失うとそれに耐え切れず発狂する。発狂を契機に無意識の暗闇にあった自我が一時的に表出するが、遂には自殺する。オフィーリアはハムレットを中心とする政治的悲劇に巻き込まれた純真無垢ではあるが、小心で、脆弱な、男たちのエゴに利用され圧しつぶされる哀れを誘う乙女である。

使用テキスト：

屋宜盛峰教授訳.『執心鐘入』『琉球大学語学文学論集』 第38号（1993年12月）.

本稿では紙幅の都合上、音記は割愛し表記のみを記載した。

松岡和子訳.『ハムレット』 東京：ちくま文庫，1996.